

解答

問一 撮影した写真から、写真が「眞を写さない」ことに偶然気づいて興奮し、いかに「眞を写さない」写真を撮るかという研究に没頭するようになったから。

問二 どんなにすばらしいアイデアを出しても、アイデアと作品の評価は切り離せないうえ、最終的には作品の出来がすべての評価を決定することに気づかされたから。

問三 やり始めたことを最後までやり遂げられない者は意志の弱い、飽きっぽい人間であり、退屈なことを一生懸命やれない者は中途半端で、いい加減な人間である。どちらも、勤勉な人間であれば必ず備えている根気というものの欠けた怠惰な人間であると評価され、気まずい思いをするということ。

問四 技術面に弱く、アイデアは出せても実現力にっぽしいという自分のコンプレックスを許容してくれて、かつ技術に長けているパートナーに作業を無条件で手伝ってもらうこと。

問五 骨
問六 ア 元 イ 子

二

問一 ① 形相 ② 元祖 ③ 積年 ④ 要領 ⑤ 都度

問二 父の仕事を見て、櫛を作るうえで大切なことは等しい拍子を身体で刻めることだと思っていた。井戸へ水汲みに行くとき、余計なことを考えず、三十歩で等しい拍子を刻みながら着けるようにしておれ、それができたため満足したのだ。

問三 登瀬は櫛を挽く父の仕事にずっと憧れてきたが、女である自分ははじめ父の仕事を手伝うことを許されていなかった。成長するにつれ、櫛磨きや本来男の仕事である粗削りも任されるようになっていたが、結婚をひかえたある日、ついに父が長年座り続けてきた場所に座ることを許されたことに驚くと同時に、師弟としての信頼関係だけではなく、娘を思う父親としての深い愛情をあらためて実感することができたのである。

問四 雑念を取り払つて

問五 今まで父以外に挽くことを許されていなかつた歯挽き鋸を父に教えられながら父の傍らでともに挽くことで、櫛挽きの仕事の奥深さに驚き、この仕事に打ち込んできた父の一生にあらためて敬意を抱くとともに、そんな父の娘として生まれ育つことができた幸せに胸が熱くなっていたから。